

—
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

皆さん。

私は今大阪にいます、ですから大阪の話をししましょう。

昔、大阪の町へ奉公に来た男がありました。名は何と云ったかわかりません。唯飯炊奉公に来た男ですから、権助とだけ伝わって

います。

権助は *1 口入れ屋の暖簾をくぐると、*2 煙管を啣えていた番頭に、こころ口の世話を頼みました。

「番頭さん。私は仙人になりたいのだから、そう云う所へ住みこませて下さい」

番頭は呆気にとられたように、暫くは口も利かずいました。

「番頭さん。聞えませんか？ 私は仙人になりたいのだから、そう云う所へ住みこませて下さい」

「まことに御気の毒様ですが、——」

番頭はへへ何時もの通り、煙草をすばすば吸い始めました。

「手前の店ではまだ一度も、仙人なぞの口入れは引き受けた事がありませんから、どうか外へ御出でなすって下さい」

すると権助は不服そうに、*3 千草の股引の膝をすすめながら、こんな理窟を云い出しました。

「それはちと話が違うでしょう。御前さんの店の暖簾には、何と書いてあると御思いなさる？ 万口入れ所と書いてあるじゃありませんか？ 万と云うからは何事でも、口入れするのがほんとうです。それともお前さんの店では暖簾の上に、嘘を書いて置いたつ

もりなのですか？」

成程こう云われて見ると、権助が怒るのも尤もです。

「いえ、暖簾に嘘がある次第ではありません。何でも仙人になれるような奉公口を探せと仰有るのなら、明日又御出で下さい。今日

中には心当りを尋ねて置いて見ますから」

番頭はとにかく一時逃れに、① 権助の頼みを引き受けてやりました。が、何処へ奉公させたら、仙人になる修業が出来るか、もとよ

りそんな事などはわかる筈がありません。ですから一まず権助を返すと、早速番頭は② 近所にある医者の中へ出かけて行きました。そ

うして権助の事を話してから、

「如何でしょう？ 先生。仙人になる修業をするには、何処へ奉公するのが近路でしょうか？」と、心配そうに尋ねました。

これには医者も困ったのでしよう。暫くはぼんやり腕組みをしながら、庭の松ばかり眺めていました。が番頭の話の聞くと、直ぐに

横から口を出したのは、古狐と云う渾名のある、狡猾な医者こうかつの女房です。

「それはうちへおよこしよ。うちにいれば二三年中には、きつと仙人せんじんにして見せるから」

「左様ですか？ それは善い事を伺いました。では何分願います。どうも仙人と御医者様とは、何処か縁が近いような心もちが致しておりましたよ」

何も知らない番頭は、頻に御辞儀を重ねながら、大喜びで帰りました。

医者は苦い顔をしたまま、その後を見送っていました。やがて女房に向いながら、

「お前は何と云う莫迦ばかな事を云うのだ？ もしその田舎者が何年いても、一向仙術を教えてくれぬなどと、不平でも云い出したら、どうする気だ？」と忌々しいまいましいそうに小言を云いました。

しかし女房はあやまるどころか、鼻の先でふふんと笑いながら、

「まあ、あなたは黙っていらつしやい。あなたのように莫迦正直では、この「せち辛い」世の中に、御飯を食べる事も出来はしません」と、あべこべに医者をやりにこめるのです。

さて明くる日になると約束通り、田舎者の権助は番頭と一しよにやってきました。今日はさすがに権助も、初の御目見えだと思つたせいか、紋附の羽織を着ていますが、見たところは唯の百姓と少しも違つた容子はありませぬ。それが反つて案外かえだったのでしよう。医者はまるで*4天竺てんじくから来た麝香じやうじやう獣じゆうでも見る時のように、じろじろその顔を眺めながら、

「お前は仙人になりたいのださうだが、一体どう云うところから、そんな望みを起したのだ？」と、不審そうに尋ねました。すると権助が答えるには、

「別にこれと云う訳もございませんが、唯あの大阪の御城を見たら、*5太閤様のように偉い人でも、何時か一度は死んでしまふ、して見れば人間と云うものは、いくら榮耀えいよう榮華えいがをしても、はかないものだと思つたのです」

「では仙人になれさえすれば、どんな仕事でもするだらうね？」

狡猾な医者こうかつの女房は、隙かさず口を入れました。

「はい。仙人になれさえすれば、どんな仕事でも致します」

「それでは今日から私の所に、二十年の間奉公おし。そうすればきつと二十年目に、仙人になる術を教えてやるから」

「左様でございますか？ それは何より難有ありがとうございます」

「その代り向う二十年の間は、一文も御給金はやらないからね」

「はい。はい。承知致しました」

それから権助は二十年間、その医者いしやの家に使われていました。水を汲む。薪まきを割る。飯を炊く。拭き掃除をする。おまけに医者いしやが外へ出る時は、薬箱を背負つて伴ともをする。——その上給金は一文でも、くれと云つた事がないのですから、この位重宝な奉公人は、

日本中探してもありますまい。

が、とうとう二十年たつと、権助は又来た時のように、紋附の羽織をひっかけながら、主人夫婦の前へ出ました。そうしてII 懇いんぎん 勤く二十年間、世話になった礼を述べました。

「就ついては兼ね兼ね御約束の通り、今日は一つ私にも、④ 不老不死になる仙人の術を教えて貰もらいたいと思ひますが」

権助にこう云われると、III 閉ひ 口くち したはのは主人の医者です。何しろ一文も給金をやらずに、二十年間も使った後ですから、今更仙術は知らぬなぞとは、云えた義理ではありません。医者はそこで仕方なしに、

「仙人になる術を知っているのは、おれの女房の方だから、女房に教えて貰ようが好よい」と、素っ気なく横を向いてしまいました。しかし女房は平気なものです。

「では仙術を教えてやるから、その代りどんなむずかしい事でも、私の云う通りにするのだよ。さもないと仙人になれないばかりか、又向う二十年の間、御給金なしに奉公しないと、すぐに罰が当って死んでしまうからね」

「はい。どんなむずかしい事でも、きつと仕遂とげて御覧に入れます」

権助はへへ喜びながら、女房の云いつけを待っていました。

「それではあの庭の松に御登り」

女房はこう云いつけました。もとより仙人になる術などは、知っている筈がありませんから、何でも権助に出来そうもない、むずかしい事を云いつけて、もしそれが出来ない時には、又向う二十年の間、唯ただで使たおうと思つたのでしよう。しかし権助はその言葉を聞くとすぐに庭の松へ登りました。

「もつと高く。もつとずつと高く御登り」

女房は縁えん 先さきに佇たすみながら、松の上の権助を見上げました。権助の着た紋附の羽織は、もうその大きな庭の松でも、一番高こずえい梢えにひらめいています。

「今度は右の手を御放し」

権助は左手にしっかりと、松の太枝をおさえながら、へへ右の手を放しました。

「それから左の手も放しておしまい」

「おい。おい。左の手を放そうものなら、あの田舎者は落ちてしまふぜ。落ちれば下には石があるし、とても命はありはしない」

医者もとうとう縁先へ、心配そうな顔を出しました。

「あなたの出る幕ではありませんよ。まあ、私に任せて御置きなさい。——さあ、左の手を放すのだよ」

権助はその言葉が終らない内に、思い切つて左手も放しました。何しろ木の上に登つたまま、両手とも放してしまつたのですから、落ちずにいる訳はありません。あつと云う間に権助の体は、権助の着ていた紋附の羽織は、松の梢から離れました。が、離れたと思う

と落ちもせず、不思議にも昼間の中空へ、まるで操り人形のように、ちゃんと立止ったではありませんか？
「どうも難有うございます。おかげ様で私も一人前の仙人になりました」

権助は叮嚀に御辞儀をすると、静かに青空を踏みながら、へ D へ高い雲の中へ昇って行ってしまいました。

医者夫婦はどうしたか、それは誰も知っていません。唯その医者 of 庭の松は、ずっと後までも残っていました。何でも*6 淀屋辰五郎は、この松の雪景色を眺める為に、四抱えにも余る大木をわざわざ庭へ引かせたそうです。
(芥川龍之介『仙人』)

【注】 *1 口入れ屋……………奉公人に仕事を世話する店。現代でいう人材派遣会社。

*2 煙管……………刻みタバコを吸うための道具。

*3 千草の股引……………千草は灰色がかった水色のこと。江戸時代、丁稚は千草色の股引をはいていた。

*4 天竺から来た麝香獸……………天竺はインドのこと。麝香獸は、香料の材料になる物質を出す、麝香鹿や麝香猫などの動物。

*5 太閤様……………豊臣秀吉のこと。太閤とは関白の位を退いた人を指す。

*6 淀屋辰五郎……………大阪の豪商である淀屋の五代目。宝永二(一七〇五)年、分に過ぎた生活をとがめられ、全財産没収、所払いの処分となる。近松門左衛門の戯曲の題材となった。

問一 次のA～Cは、小説の冒頭部分です。それぞれの小説の作者を、後のA～クより選び、記号で答えなさい。

A 親譲りの無鉄砲で小供こどもの時から損ばかりして居る。

B 或春あるの日暮です。唐の都洛陽らくやうの西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。

C 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。

ア 森鷗外 イ 中島敦 ウ 島崎藤村 エ 芥川龍之介
オ 太宰治 カ 川端康成 キ 夏目漱石 ク 三島由紀夫

問二 へ A へ へ D へ を補う言葉として最もふさわしいものを、次のア〜コより選び、記号で答えなさい。同じ記号を二度以上選んではいけません。

ア	きつと	イ	まるで	ウ	そろそろ	エ	かねがね	オ	あたふた
カ	やっと	キ	よもや	ク	いそいそ	ケ	だんだん	コ	ほくほく

問三 〜〜〜Ⅰ〜Ⅲのここでの意味として最もふさわしいものを、次のア〜オよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

I	せち辛い	ア	人づきあいの難しい	II	慇懃に	ア	うわの空で	III	閉口した	ア	口ごもった
		イ	生活するのが大変な			イ	ぞんざいに			イ	やりこめた
		ウ	見るにしのびない			ウ	えらそうに			ウ	弱りはてた
		エ	計算高くてけちな			エ	自分勝手に			エ	ごまかした
		オ	思い通りにいかない			オ	ていねいに			オ	とりなした

問四 ①「権助の頼みを引き受けてやりました」について、番頭はなぜ引き受けることにしたのですか。三十字以内で説明しなさい。

問五 ②「近所にある医者の中へ出かけて行きました」について、番頭が医者の中を選んだ理由を示す一文を、本文より選び、最初の五字をぬき出しなさい。

問六 —— ③ 「それはうちへおよこしよ」について、医者の女房は、どういう考えからこう言ったのですか。最もふさわしいものを、次のア〜オより選び、記号で答えなさい。

- ア 分別のない田舎者も、立派な医師の家で奉公できるならきつと納得するに違いない、という考え。
- イ 右も左もわかっていない若者を自分の元で教育し、いづれ立派に独立させてやろう、という考え。
- ウ 仙人になりたいなどと言う若者に単純な興味を持ち、どんな人間か会ってみたい、という考え。
- エ いかにも世間知らずな田舎者をうまく言いくるめて、自分の家でこき使ってやろう、という考え。
- オ 途方もない要求を持って余している番頭を気の毒に思い、何とか力になってやろう、という考え。

問七 —— ④ 「不老不死になる仙人の術を教えて貰いたい」について、権助はなぜそう考えているのですか。三十字以内で説明しなさい。

問八 次のア〜カより、説明に誤りを含むものを二つ選び、記号を五十音順に並べなさい。

- ア 医者は、女房に押し切られてしまう一面はあるが、ものごとを常識的に判断する人物である。
- イ 医者の女房は、古狐というあだ名の通り、言葉たくみに相手を言いくるめることに長けている。
- ウ 医者の女房は、仙術を心得ていることを誰にも打ち明けずに権助を鍛え、とうとう仙人にした。
- エ 権助は、強い思いをひたむきに持ち続けた結果、医者の女房の打算を超えて本当に仙人になった。
- オ この小説は、仙人になった「私」の回想として、大阪での二十年間を語る形で書かれている。
- カ この小説は、語り手から読者に、大阪を舞台にした昔話を語る、という方法で書かれている。

二
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

水の存在感は空気と同様であつて、生命のある所どこにでもあり、身近すぎて気づきにくいものである。故に古い時代から、水は万物の根源的な構成要素と見なされてきた。水はまた①千変万化して、一つとして同じ形をとらない。凍れば固体であり、蒸気になれば気体である。水は人知を超えて人間と多様に関わる。沙漠で喉が渴いたときに飲む水は命を支える恵みであり、洪水で押し寄せる水は生命を脅かす恐怖である。生命の営みは水の介在なしに起こりえない。しかし、水が一つの物質(H₂O)として理解されるようになったのはごく最近で、②(一)二〇〇〇年程度にすぎない。

*1川の工事をしていても浮かぶ疑問は、古い時代の人々がこの水をどう感じ、どう理解していたのかということである。体系的知識は、今より余程少なかったであろう。それでも、科学以前から水は人間生活に深く関わり、それなりの深い理解があつたはずだ。治水によって古代中国を治めた聖人も、*2満濃池を改修した弘法大師も、*3山田堰を完成した古賀百工も、河川工学や水理学など知らなかったはずだ。

水は人間を律する神の手である。どんな宗教でも、水を清めの媒体とすることが普通であつた。神社では手を清める場所があり、キリスト教会では洗礼の際に水で清める。イスラム教でも礼拝所には必ず体を洗う場所が備えられている。メツカの湧水(ザムザムの水)は特別な恵みがあると解され、巡礼の際に持ち帰る信徒が多いという。

ずいぶん前になるが、九歳の次男が悪性の脳腫瘍に罹り、余命一年と宣告された。折から現地はA空前の大干ばつで、栄養失調で弱つた子供たちが次々と感染症で倒れていた。それを必死で訴えていた矢先である。

忘れもしない二〇〇一年夏、帰宅したとき、「左手が動かない」との訴えを初めて子供から聞いた。左上肢だけの単マヒで、当初は肩関節の脱臼かと思つた。整形外科では診断がつかかなかつたので、自分で診察すると、脳内病変が疑われた。当時勤務していた脳外科の病院で検査をした結果、右頭頂葉の皮質に病変を認め、間違いないと判断された。③専門が脳神経であることが苦痛であつた(悪性脳腫腫という脳腫瘍は子供ではまれであるが、当時二年生存率はゼロとされていた)。末期の状態は分かり切つていた。病院では死が隠される。本人の姿ではなくモニターの画面を囲み、心肺停止を待つ臨終は受け入れがたい。なるべく自宅に置き、家族皆で看病した。

そのことを伝え聞いた。ペシャワールの*4 PMS病院の事務長が、④後生大事に小瓶に詰めた「ザムザムの水」を届けてくれた。メツカ巡礼の際に持ち帰り、大切に保存しておいたものだ。彼は陸軍の退役少佐(major)であつた。軍人でありながら深い信心の持ち主で、額にたこがあつた(礼拝の際に額を地面にすりつけるので、これは相当な熱心さを意味する)。曲がったことが嫌いで職員に対しても厳格だつたから、口の悪い者は「原理主義者」などと陰口をたたく程であつた。

おそらく普段なら、「苦しい時の神頼み」とか、「縁起かつぎの御利益」くらいにしか考えなかったであろう。だが、このときばかりは、そんな他人事のような言葉の方が、白々しく思えた。対照的に、退役少佐の贈り物には、特別の響きがあった。神癒があり得るかという、神懸かり的な話ではない。彼は他人の子供のために、心魂を込めて奇跡を祈ったのだ。その心情自体が尊く、理屈はなかった。当方も一縷の望みを託して、毎日数滴ずつをジュースに混ぜて与え、回復を祈った。

医師生活の最後の奉公と見て手を尽くしたが、次男は宣告された通りに死んだ。享年一〇歳であった。ザムザム水の効き目がなかったではないかと、のちに心ない冗談を言う者もいたが、^⑤胸中に残る温かい余韻を忘れることができない。我々の持つ世界観、いわゆる「科学的常識」は、しばしば味気ない理屈と計算で構成されている。水を届けた者のまごころがうれしかっただけではない。あの水は、紛れもなく「聖水」であったと思っっている。さかしい理屈の世界から解放され、その奥に厳然とある温かい摂理を垣間見られたことに、今でも感謝している——今日も川のほとりで眺める水は、天空を映してあくまで青く、真っ白に砕ける水しぶきが凜として、とりとめもなく何かを語る。

(中村哲『希望の一滴』)

【注】

* 1 川の工事……筆者は一九八四年から、パキスタン北西部のペシャワールを拠点として難民への医療活動を始め、アフガニスタン国内へ活動を広げる中、二〇〇〇年の大干ばつに直面し、「もはや病の治療どころではない」との思いで井戸を掘り始め、二〇〇三年からは大規模な用水路の建設に着手していた。

* 2 満濃池……香川県にある日本最大のため池。奈良時代に造られた。

* 3 山田堰……福岡県の筑後川中流域にある井堰(水をせき止める設備)。庄屋古賀百工が江戸時代に改修した。筆者は全国の堰を訪ねた末に、山田堰を何度も視察して研究を重ね、アフガニスタンでの灌漑用水モデルとした。

* 4 PMS……筆者の活動を支援するために結成された国際団体 (Peace Japan Medical Services 平和医療団・日本)。

問一 ～～～～A～Eのここでの意味として最もふさわしいものを、次のア～オよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|--------|---|------|---|--------|---|-----|---|-------------|
| A | 空前の | ア | 今までにない | B | 白々しく | ア | さりげなく | C | 一縷の | ア | 片時も心から離れない |
| | | イ | 予想もしない | | | イ | 投げやりに | | | イ | ひたむきに念じている |
| | | ウ | 以前から続く | | | ウ | いかめしく | | | ウ | かすかにつながっている |
| | | エ | 先の見えない | | | エ | わざとらしく | | | エ | 家族が心を合わせている |
| | | オ | さしせまった | | | オ | 真実味がなく | | | オ | 他の全てを捨ててもよい |

- | | | | | |
|---|-----|-----------------------------|------|-------|
| D | 心ない | E | さかしい | |
| | ア | 悪気のない | ア | 分をこえた |
| | イ | いわれのない | イ | 勢いのある |
| | ウ | なじみのない | ウ | 完成された |
| | エ | 配慮 <small>はいりよ</small> に欠ける | エ | おそれ多い |
| | オ | 本心と異なる | オ | ゆるぎない |

問二 —— ① 「千変万化」、 —— ④ 「後生大事」の読み方を、ひらがなで答えなさい。

問三 —— ② 「二〇〇〇年程度にすぎない」について、それ以前の人々は、水をどういうものとして理解してきましたか。本文より、その答えに当たる表現を二つ選び、一つ目は十五字以内で、二つ目は十字以内で、それぞれぬき出しなさい。本文よ

問四 ─── ③ 「専門が脳神経であることが苦痛であった」について、筆者はなぜそう感じたのですか。三十字以内で説明しなさい。

問五 ─── ⑤ 「胸中に残る温かい余韻」とは、筆者の心に残るどういう感情ですか。五十字以内で説明しなさい。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

先日の*¹ある審議会で、局所的判断や短期的視野を得るには論理や合理や理性だけで間に合うかも知れないが、正しい大局観や長期的視野を得るにはそうはいかない、一見役に立ちそうもない文学、芸術、歴史などの教養、そして誠実、慈愛、勇氣、正義感、卑怯^{きせう}を憎む心、美的感受性、もののあわれ、家族愛、^Aキョウド愛、祖国愛、人類愛といった情緒が必要、と私は述べた。これに異論が出たのは予想外だった。

論理というものは、単純化すると、AならばB、BならばC、CならばDと続き、Zまで行くものである。Aを出発し、論理の鎖^{くさり}を通り結論のZに達することになる。Aは出発点だから当然、論理的帰結ではなく仮説である。論理は必ず仮説から出発することになる。

この仮説は通常、多くの可能性の中から、その人の価値観、人生観、世界観、人間観といったものにより選ばれる。そしてこれらの基底となるものが、先ほど述べたような教養や情緒、宗教といったものである。

①例えば日本の食料を考えてみよう。穀物自給率を見ると、昭和三五年に八二パーセントだったものが平成九年には二八パーセントにまで激減している。ちなみに他の先進国ではその間、フランスが一六パーセントから一九八パーセント、ドイツが六二パーセントから一一八パーセント、日本と同じ島国のイギリスでさえ五三パーセントから一三〇パーセントといずれも逆に急増させている。

日本の輸入食料で量が多すぎるものは、順にとうもろこし、小麦、大豆だが、それぞれの九割、五割、八割がアメリカからの輸入である。わが国の農家は輸入品に価格で太刀打ちできない。そのため、作付け^Bの面積も大きく減少している。

これら統計を見て、祖国愛など古いと思っている地球市民は、「世界はグローバル化していて、各国個別のアンバランスを気にしていたら、世界^Cポウエキは縮小する。市場原理を貫くことこそが世界そして日本の繁栄につながる」とまず思うだろう。

今こそ祖国愛と思う人は「国防と食料だけは、他国との協力態勢は当然としても、自ら確保するのが独立国家だ」という考えが頭に浮かぶだろう。家族愛が何より強い人は「輸入先が一国に偏っているし、大きな国際紛争でも起きたら子供たちは一年もたたぬうちに餓死してしまう」とまず背筋を凍らせるだろう。美的感受性やもののあわれが強烈な人は、近頃めつきり荒れてきた田園を思いだし、背景に作付け面積の低下があったのだ、と慨嘆^{がいたん}するだろう。

各自の議論の出発点はこのようにして決まる。そこから出発し、地球市民派は「自給率の低落は、市場の力により日本の構造改革が順調に進んでいることを示している。(Ⅰ)〜」と論理的に結論するだろう。祖国愛派や家族愛派は「欧州先進国なみとまではいかなくとも、(Ⅱ)〜パーセントを目ざし具体的計画を早急に練るべき」と結論するだろう。

美的感受性派やものあわれ派は、「日本の伝統的な文化、芸術、文学などの根底にあるのは類い稀な美意識とものあわれであり、これはわが国が世界に誇る情緒だ。この情緒の母胎は四季の変化に恵まれた日本の美しい自然であり、棚田などの芸術的景觀だ。これはどんな犠牲を払ってでも守るべきものだ。」Ⅲが半分になっても食料増産を進め、農業と自然を守るべき」と結論するだろう。

その人の教養とか、それに裏打ちされた情緒の濃淡や型により、大局観や出発点が決まり、そこから結論まで論理で一気に進むということになる。どんな事柄に関しても論理的に正しい議論はゴロゴロある。その中からどれを選ぶか、すなわちどの出発点を選ぶかが決定的で、この選択が教養や情緒でなされるのである。論理は得られた結論の実行可能性や影響を検証する際に、はじめて有用となる。現在、わが国の政治、経済、社会、教育はどれもうまくいかないでいる。改革につぐ改革がなされているが、一向に功をソウさず国家はEキキにある。原因は各界のリーダーたちが正しい大局観を失ったことにあり、その底流には国民一般における教養や情緒力の低下があるのでないか。

この回復は活字文化の復興なくしてありえない。真の教養のほとんど美しい情緒の大半が、読書などを通じて育つからである。情報社会でもっとも大切なのは、いかに情報を得るかでなく、いかに情報に流されず本質を掴むかである。大局観を持つことである。活字文化は②情報時代にこそ重みを増すのだと思う。

(藤原正彦『祖国とは国語』)

【注】 *1 ある審議会………筆者は二〇〇一年から二〇〇四年まで、文部科学省の文化審議会委員を務めていた。

問一 —— AとEのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 へ I へ Ⅲ へ を補う言葉として最もふさわしいものを、次のア～オよりそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|--------|----|---|------|-----|---|-------|
| I | ア | 思いがけない | II | ア | 二〇〇 | III | ア | 芸術的景観 |
| | イ | やむを得ない | | イ | 五〇〇 | | イ | 穀物輸出高 |
| | ウ | うらやましい | | ウ | 一〇〇〇 | | ウ | 市場価格 |
| | エ | おもしろい | | エ | 一五〇〇 | | エ | 国民所得 |
| | オ | 素晴らしい | | オ | 二〇〇〇 | | オ | 作付け面積 |

問三 —— ①「例えば日本の食料を考えてみよう」について、筆者はどういうことの例として、食料自給率の話をしたのですか。最もふさわしいものを、次のア～オより選び、記号で答えなさい。

- ア 日本のリーダーは長期的視野に欠けており、どの分野でもその場しのぎの対応に終わっている、ということ。
- イ 一つの事実も、見る人それぞれの論理で異なる過程をたどること、より多角的に分析できる、ということ。
- ウ どんな統計も、諸外国や過年度のものと比較してみて初めて、様々な問題点が明らかになる、ということ。
- エ 一つの事実が、見る人によって様々にとらえられ、そのとらえ方によって異なる結論を導く、ということ。
- オ 日本が欧米諸国と肩を並べるには、論理的思考力よりも伝統的情緒力を高めなければならない、ということ。

問四 —— ② 「情報時代にこそ重みを増すのだ」について、筆者は、活字文化のどのような働きを重視していますか。三十字以内で説明しなさい。

問五 本文の内容として正しいものを、次のア～オより一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人は世界に誇れる伝統文化を持っているが、国際社会への発信力に欠けているために、どの改革も失敗している。
- イ 論理的思考に基づく大局観こそ、情報社会のリーダーとして不可欠な資質であり、早急に養成されなければならない。
- ウ 論理的思考は情緒力に支えられており、日本人固有の部分よりも、欧米人と重なる部分を大切にしなければならぬ。
- エ 教養の質や深さは、激化する国際競争の中で食料自給率を確保するために、今後一層重要になっていくはずである。
- オ 日本人は情緒と教養の低下により伝統的価値観を失ったために、どの分野でも広い視野による方向性を誤っている。